

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝文人傳 陶潛傳（『宋書』卷九三）
Author(s)	森野, 繁夫
Citation	中國中世文學研究, 57 : 127 - 156
Issue Date	2010-03-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051424">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051424</a>
Right	
Relation	



# 六朝文人傳 陶潛傳 (『宋書』卷九三)

森野繁夫

陶潛傳には『宋書』『晉書』『南史』および梁、蕭統「陶淵明傳」があるが、ここでは『宋書』に拠り、その他のものは参考として後に附した。

## 『宋書』陶潛傳

(一)

陶潛、字淵明。或云、淵明、字元亮。尋陽柴桑人也。曾祖侃、晉大司馬。潛少有高趣、嘗著「五柳先生傳」以自況曰、

先生不知何許人、不詳姓名。宅邊有五柳樹、因以爲號焉。閑靜少言、不慕榮利。好讀書、不求甚解、每有會意、欣然忘食。性嗜酒、而家貧不能恒得。親舊知其如此、或置酒招之。造飲輒盡、期在必醉。既醉而退、曾不吝情去留。環堵蕭然、不蔽風日。短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也。嘗著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終。

其自序如此。時人謂之實錄。

陶潛、字は淵明、或いは云ふ、淵明、字は元亮。尋陽は柴桑の人なり。曾祖は侃、晉の大司馬。潛少くして高趣有り、嘗て「五柳先生傳」を著して、以て自ら況へて曰く、

先生は何許の人なるかを知らず、姓字を詳かにせず。宅邊に五柳樹有り、因りて以て號と爲すなり。閑靜にして言少く、榮利を慕はず。讀書を好むも、甚だしくは解するを求めず、意に會する有る毎に、欣然として食を忘る。性酒を嗜むも、而も家は貧にして恒には得る能はず。親舊其の此の如きを知り、或いは酒を置きて之を招く。造りて飲めば輒ち盡し、期するは必ず醉ふに在り。既に醉へば退き、曾て情を去留に吝かにせず。環堵蕭然として、風日を蔽はず。短褐穿結し、簞瓢屢ば空しきも、晏如たるなり。嘗に文章を著して自ら娛し、頗か己の志を示し、懷ひを得失に忘れ、此を以て自ら終る。

其の自ら序ぶること此の如し。時人之を實録と謂ふ。

## 【語釈】

「陶潛」東晉、興寧三年(三六五)〜宋、元嘉四年(四

(二七) 晉宋間の人。

「曾祖侃」二五九〜三三四。呉の將軍陶丹の子で、晉の名將。

「高趣」志が清く高いこと。

「五柳先生傳」「本集」には「五柳先生傳」の後に「贊曰」として次の文がある。

黔婁有言、不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴。極其言、茲若人之儔乎。酣觴賦詩、以樂其志。無懷氏之民歟、葛天氏之民歟。

黔婁言へる有り、貧賤に戚戚たらず、富貴に汲汲たらずと。其の言を極むるに、茲れ若き人の儔か。

酣觴して詩を賦し、以て其の志を樂しましむ。無懷氏の民か、葛天氏の民か。

「黔婁」古の賢士。隱士。「汲汲」速やかならんと欲する形容。「極其言」黔婁の言葉に当てはまる人としては。「無懷氏」上古の帝。「葛天氏」上古の帝。

「不知何許人」「人」下、「本集」には「也」字あり。「不詳姓字」「本集」には「不」の上に「亦」字あり、「姓」の上に「其」字がある。

「閑靜」もの静かなさま。「欣然忘食」「論語」述而篇に「其の人と爲りや、發憤して食を忘れ、樂しんで以て憂ひを忘る」とある。「欣」の上、「本集」は「便」字あり。

「不能恒得」「恒」字、「本集」は「常」に作る。「或置酒招之」「酒」の下、「本集」は「而」字あり。

「環堵」四方が一堵ずつしかない土墾。「堵」は、長さ一丈、高さ一丈。「環堵」は方丈の家。狭い家のこと。『禮記』儒行篇に「儒に一畝の宮、環堵の室有り」とある。

「襤褐穿結」「襤褐」は、貧賤の者の衣服。「穿結」は、破れて穴が開き、周囲を結び合わせて塞いでいること。

「簞瓢屢空」瓢簞の中の酒が、屢々空になつてゐる。「忘懷得失」得失のことを全く気にしない。

### 【訳】

陶潛、字は淵明。或いは淵明、字は元亮と言う。尋陽は柴桑の人である。曾祖は侃で、晉の大司馬。潛には若いころから高き趣が有り、嘗て「五柳先生傳」を著して、自分を況えて言うには、

先生は何許の人なかわからないし、姓字も詳しいことはわからない。宅邊に五本の柳の樹が有り、それによつて號としてゐる。閑靜で口数は少く、榮利を慕はない。讀書を好むが、そんなにわかるうとはせず、自分の思いに適う所が有る毎に、欣然と喜んで食事を忘れた。生まれつき酒が好きだが、家が貧しくて恒には手に入れることはできなかった。親戚や舊友は其の様子を見て、酒を用意して招いたりした。やつて來て飲めばそのたびに飲み盡し、必ず酔ふことが目的であつた。酔へば歸り、立ち去りがてにすることは嘗て無かつた。狭い家は粗末で、風や日避けることはできなかった。短い毛皮の上着はぼろ

ぼろで、食べ物飲み物は屢しばしばば不足したが、氣にもしていなかった。いつも文章を作つて娛たのしみ、いささか自分の志を示した。世間的な得失を忘れ、かくてひとり亡なくなった。

淵明は自分のことをこのように序べている。時の人はこれを實録と謂つた。

(二)

親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸。州召主簿、不就。躬耕自資、遂抱羸疾。復爲鎮軍、建威參軍。謂親朋曰「聊欲弦歌、以爲三逕之資、可乎。」執事者聞之、以爲彭澤令。

公田悉令吏種秫稻、妻子固請種秬。乃使二頃五十畝種秫、五十畝種秬。郡遣督郵至縣。吏白應束帶見之、潛嘆曰「我不能爲五斗米折腰向鄉里小人。」即日解印綬去職。賦「歸去來」、其詞曰、

親おや老い家い貧ひんにして、起たちて州の祭酒と爲るも、吏職に堪たへず、少日にして自ら解ときて歸る。州主簿に召すも、就たかず。躬みづから耕かして自ら資するも、遂に羸よ疾ぢを抱く。復た鎮軍、建威參軍と爲る。親朋に謂いひて曰く「聊いか弦歌して、以て三逕の資と爲さんと欲す、可なるか」と。事ことを執る者之を聞き、以て彭澤の令と爲す。

公田に悉ことごとく吏をして秫じゅう稻とうを種くえしめんとするも、妻子固かく秬かうを種くえんことを請ふ。乃ち二頃五十畝をして秫じゅうを種くえしめ、五十畝に秬かうを種くう。郡督郵を遣し

て縣に至らしむ。吏應まさに束帶そくたいして之に見ゆべしと白す。潛は嘆じて曰く「我は五斗米の爲に腰を折りて郷里の小人に向ふ能はず」と。即日印綬を解きて職を去る。「歸去來」を賦す。其の詞に曰く、

【語釈】

「親老家貧」『韓詩外傳』第一章に「家貧にして親老いたる者は、官を擇えらばずして仕ふ」とある。

「躬耕自資、遂抱羸疾」自分で耕作して生活したが、過勞の爲に病氣になった。

「復爲鎮軍、建威參軍」時の鎮軍將軍は、劉裕か劉牢之か。建威將軍は劉牢之の長子、劉敬宣。

「聊欲弦歌」『論語』陽貨篇の、子游が武城の令になった時の話による。「子武城に之ゆき、絃歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑ひて曰く、鶉うを割きくに焉いんぞ牛刀を用ひんと。子游對こたへて曰く、昔者ひかし偃えんや語ごを夫子に聞く、曰く、君子道を學べば則ち人を愛し、小人道を學べば則ち使たひ易やすきなり」と。

「以爲三逕之資」後漢の隱者、蔣詡しやうくの故事による。『三輔決錄』に、「蔣詡は舍下の竹下に三逕を開き、唯だ求仲、羊仲と之に従ひて遊ぶ」とある。淵明は隱棲のための費用を用意するために、どこかの県令になりたいと言つた。隱棲のための費用とは、具体的に何のために必要なのであらうか。未詳。

「彭澤令」「彭澤」は、尋陽郡治下の縣。「秫稻」酒米。

「杭」うるち米。酒米と區別している。

「束帶」官吏としての禮裝。

「五斗米」下級役人の僅かな給料を意味する。

「即日解印綬去職」潜が職を去つたのは、義熙一年（四〇五）、四十一歳。

### 【訳】

親お老ひんい家貧ひんにして、起ちて州の祭酒と爲つたが、官吏の職に堪えられず、ほどなく自分から辞任して歸つた。州は主簿として召したが、就任しなかつた。躬ら田畑を耕して生活していたが、そのため病氣になつてしまつた。復た鎮軍參軍や建威參軍と爲つた。

親戚や友人に言うには、「聊まか縣令になつて、隱遁生活の足しにしたいのだが、どうだろうか」と。（州の）係の者がそれを耳にして、彭澤縣の令とした。潜が下役に言つて公田に悉く酒米を種えさせようとしたところ、妻子はどうしても粳米を種えてほしいと頼んだ。そこで二頃五十畝に酒米を種えさせ、五十畝に粳米を種えた。郡が監督官を縣に派遣してきた。役人が潜に正装して應對するように言つた。潜は嘆息して「私は僅かな給料のために、郷里の小人などに腰を折るわけにはいかない」と言い、即日印綬を解いて職を去つた。「歸去來の辭」を賦したが、その内容は次のようであつた。

歸去來兮、園田荒蕪、胡不歸。  
既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲。

悟已往之不諫、知來者之可追。  
實迷塗其未遠、覺今是而昨非。

舟超遙以輕颺、風飄颺而吹衣。

問征夫以前路、恨晨光之希微。

歸りなんいさ、園田 荒蕪せんとするに、胡た歸らざり。既に自ら心を以て形の役と爲す、奚なん惆悵たうざうとして獨り悲しまんや。已往の諫められざるを悟り、來者の追ふ可きを知る。實に塗に迷ふこと其れ未だ遠からず、今の是にして昨の非なるを覺る。

舟は超遙として以て軽く颺り、風は飄颺として衣を吹く。征夫に問ふに前路を以てし、晨の光の希微なるを恨む。

乃瞻衡宇、載欣載奔。僮僕歡迎、稚子候門。  
三徑就荒、松菊猶存。攜幼入室、有酒停尊。

引壺觴而自酌、吟庭柯以怡顏。  
倚南窗而寄傲、審容膝之易安。

乃ち衡宇を瞻、載ち欣び載ち奔る。僮僕 歡び迎へ、稚子門に候つ。三徑、荒に就くも、松菊猶ほ存す。幼を攜へて室に入れば、酒有りて尊に停まる。

壺觴を引きて自ら酌み、庭柯を吟めて以て顔を怡たばす。南の窓に倚りて傲を寄せ、膝を容るるの安んじ易きを審らかにす。

園日涉而成趣、門雖設而常關。  
策扶老以流悵、時矯首而遐觀。

雲無心以出岫、鳥勸飛而知還。

景翳翳其將入、撫孤松以盤桓」

園は日に涉りて趣きを成し、門は設くと雖も而も常に關せり。扶老を策きて以て流愴し、時に首を矯げて遐かに觀む。雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶに勸みて還るを知る。景は翳翳として其れ將に入らんとし、孤松を撫でて以て盤桓す。

歸去來兮、請息交而絕遊。

世與我以相遺、復駕言兮焉求。

說親戚之講話、樂琴書以消憂。

歸りなんいさ、請ふ交はりを息めて遊びを絶たん。

世と我と以に相遺る、復た駕して言に焉をか求めん。

親戚の講話を説び、琴書を樂しみて以て憂ひを消さん。

農人告余以上春、將有事于西疇。

或命巾車、或棹扁舟。

既窈窕以窮壑、亦崎嶇而經丘。

木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。

善萬物之得時、感吾生之行休。

農人余に告ぐるに上春を以てし、將に西の疇に事有らんとす。或いは巾車を命じ、或いは扁舟に棹す。

既に窈窕として以て壑を窮め、亦た崎嶇として丘を經。

木は欣欣として以て榮に向ひ、泉は涓涓として始めて流る。萬物の時を得たるを善し、吾が生の行く休むを感ず。

已矣乎、萬形宇内復幾時。

已矣乎、萬形宇内復幾時。

奚不委心任去留、胡爲遑遑欲何之。

富貴非吾願、帝鄉不可期。

懷良辰以孤往、或植杖而耘耔。

登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。

聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑。

已ぬるかな、形を宇内に寓すること復た幾時ぞ。奚ぞ心を委ねて去留に任せざる、胡爲れぞ遑遑として何に之かんと欲する。富貴は吾が願ひに非ず、帝郷は期す可からず。良き辰を懷ひて以て孤り往き、或いは杖を植てて耘耔す。東の臯に登りて以て舒るに嘯き、清流に臨みて詩を賦す。聊か化に乗じて以て盡るに歸せん、夫の天命を樂しみて復た奚をか疑はん。

【語釈】

「園田荒蕪、胡不歸」「園田荒蕪」四字、『文選』四五、

『晉書』『南史』は「園田將蕪」（園田將に蕪れんとす）。

「本集」は「田園將蕪」。

「悟已往之不諫、知來者之可追」『論語』微子篇に「楚の

狂 接輿曰く、鳳や鳳や、何ぞ徳の衰へたる。往く者は。諫

むべからず、來る者は猶ほ追ふべし」とある。

「覺今是而昨非」『莊子』則陽篇に「蓬伯玉 行年六十に

して六十たび化れり。未だ嘗て之を是とするに始まりて、

卒に之を詘くるに非を以てせずんばあらざるなり。未だ

今の所謂る是の、五十九の非に非ざること知らず」とある。

「舟超遙以輕颺」「超遙」二字、『文選』『晉書』『南史』

は「遙遙」に作る。

「恨晨光之希微」「希」字、『晉書』同じ。『文選』『南史』は「薰」に作る。

「載欣載奔」『詩經』廓風、載馳に「載ち馳せ載ち驅け、歸りて衛侯を唁はん」と。

「三徑就荒、松菊猶存」漢の隱士蔣詡の故事による。『三輔決錄』に「蔣詡、字は元卿、舎中の三逕は、唯だ羊仲、求仲のみ、之に従つて遊ぶ」と。三逕には松、菊、竹が植えられていた。

「有酒停尊」嵇康の「秀才の軍に入るに贈る」詩に「旨き酒は樽に盈つるも、與に歎びを交すもの莫し」と。「停尊」の意味未詳。この二字、『文選』『晉書』『南史』『本集』は「盈罇」に作る。「尊、罇」は古今の字。

「審容膝之易安」『韓詩外傳』卷九に「北郭先生の妻曰く、今如し駟を結び騎を列ぬるも、安んずる所は膝を容るるに過ぎず。食は前に方丈なるも、甘しとする所は一肉に過ぎず。膝を容るるの安き、一肉の味を以て、楚國の憂ひに殉じて、其れ可ならんや」とある。

「請息交而絕遊」『列子』楊朱に「公孫穆は、親昵を屏け、交遊を絶ち、後庭に逃れ、書を以て夜に足すと。「交遊」は、官吏同士の交遊。

「世與我以相遺」「遺」字、『南史』は「違」に作る。「復駕言兮焉求」「駕」は、官吏となることを言う。官吏となつて何を求めようというのか。

「農人告余以上春」「上春」二字、『文選』『南史』『本集』は「春及」に作り、『晉書』は「暮春」に作る。

「或命巾車、或棹扁舟」「或命巾車」、『文選』江文通「擬陶徵君詩」注引は「或巾柴車」に作る。「扁舟」、『文選』『晉書』は「孤舟」に作る。

「既窈窕以窮壑」「窈窕」は、奥深いさま。「窮」字、『文選』は「尋」に作る。

「泉涓涓而始流」「涓涓」は、水がちよろちよろ流れるさま。凍っていた水が溶けて流れだした。『孔子家語』觀周に「涓涓として壅がず、終には江河と爲る」とある。

「已矣乎」絶望の辭。『論語』公冶長篇に「子曰く、已んぬるかな。吾未だ能く其の過ちを見て内に自ら訟むる者を見ず」とある。

「寓形宇内復幾時」『尸子』卷下に「老萊子曰く、人の天地の間に生まるるや寄するなり」と。

「奚不委心任去留」嵇康の「琴賦」に「萬物を齊しとして超として自得す。性命に委ねて去留に任せん」とある。

「遑遑」慌てるさま。「富貴非吾願」『大戴禮』に「孔子曰く、謂はゆる賢人とは、躬は匹夫と爲るとも、富貴を願はず」とある。

「帝鄉」仙人の世界。『莊子』天地篇に「彼の白雲に乗じて、帝郷に至らん」と。

「或植杖而耘耔」『論語』微子篇に「丈人曰く、四體勤めず、五穀分かつたず。孰をか夫子と爲すと。其の杖を植てて芸る」とある。

「登東臯以舒嘯」阮籍「蔣公に詣るに、「方將に東臯の陽に耕し、黍稷の税を輸し、以て當塗者の路を避けん」と。

「臨清流而賦詩」嵇康「琴賦」に「清流に臨みて新詩を賦す」とある。

「聊乘化以歸盡」「化」は、自然造化の力。

「樂夫天命」「周易」繫辭伝上に「天を樂しみ命を知る、故に憂へず」とある。

### 【訳】

さあ歸ろうか、園田は荒蕪あればてようとしているのに、どうして歸らないのか。これまでは、進んで我が心を身体の奴隸としてきたのだ。くよくよと獨り悲しむことはもう止めよう。過ぎ去ったことは今更取り返せないが、これからのことはどうにでもなる。確かに我が人生における進路を踏み誤ったが、まだそれほど深入りはしていない。役人を辞めた今の自分が正しくて、昨日までの自分は間違っていたのだ。

舟はゆらゆらと軽く揺れ動き、風はひらひらと我が衣を吹く。旅人に故郷までの道程を尋ね、朝の光がぼんやりとしていて見通しの利かないのを残念に思う。

やつと我が家の門と屋根が見え始め、嬉しくなつて駆けて行く。召し使いも喜んで迎えてくれ、幼い子供たちは門のところでの私の歸りを待っていた。庭の三本の小道は荒れかけているが、松や菊はまだ昔のまま残っている。幼子を連れて部屋に入ると、酒が樽に用意されている。徳利と杯を引き寄せて酌んでは飲み、庭の木の枝を眺めつつ顔を綻ほころばせる。南の窓に凭よりかかり、伸び伸びと寛くわんぎ、膝をやつと入れて坐るような狭い所でも、我が家で

あれば氣が樂であることをしみじみと味わう。

庭は毎日眺めまわるにつけ趣きを増し、門は設けてはいるが閉ざされたままだ。杖をついて老いの身を助け、あちらこちらを巡り歩いては休憩し、時には頭を上げて遙かに見渡す。雲は自ら山の洞穴から湧き起り、鳥は飛ぶことに疲れたら、埒あたりに歸ることを知っている。夕日はほの暗く今にも沈もうとしている。私は一本の松を撫でながら、立ち去り難く思う。

さあ歸ろうか、世俗との交わりを絶ちたいものだ。世間も私を忘れ、私も世間を忘れたのだ。今更 仕官して何を求めようというのか。郷里の親戚の心暖まる話を喜び、琴と書物を樂しんで憂さを晴らそう。

農夫が私に、春が來たことを告げた。これから西の田で仕事が始まるという。幌馬車を用意させたり、小舟に棹こしたりして、奥深い谷を尋ねてゆき、丘の険しい道を通つて行く。木は生き生きとして花を咲かせようとし、泉はちよるちよると流れ始めている。萬物が此の好き季節に巡りあつたことを喜ばしく思うとともに、我が命がだんだんと終わりになつていくのを感じる。

どうしようもない。此の世に身体を預けることは、どれほどもないのだ。どうして自然に委ね、天命に任せないのか。どうしてうろろる慌てて、どこへ行こうとするのか。富と位は私の願うものではなく、また仙人の住處すまひは期待できない。

天氣の好い日には獨りで出かけ、杖を立てて雑草を取



つたり、土をかけたたりする。東の丘に登って嘯うたき、清らかな流れを前にして詩を詠む。先ずは自然の変化に任せて、我が命の終わるのを待とう。天命を樂しんで、もはや何も疑うまい。

(三)

義熙末、徵著作佐郎、不就。江州刺史王弘欲識之、不能致也。潛嘗往廬山。弘令潛故人龐通之齎酒具於半道栗里要之、潛有脚疾、使一門生二兒輩籃輿。既至、欣然便共飲酌。俄頃弘至、亦無忤也。

先是、顏延之爲劉柳後軍功曹、在尋陽、與潛情款。後爲始安郡、經過、日日造潛、每往必酣飲致醉。臨去、留二萬錢與潛、潛悉送酒家、稍就取酒。

嘗九月九日無酒、出宅邊菊叢中坐久。值弘送酒至、即便就酌、醉而後歸。

潛不解音聲、而畜素琴一張、無絃。每有酒適、輒撫弄以寄其意。

貴賤造之者、有酒輒設。潛若先醉、便語客「我醉欲眠、卿可去。」其眞率如此。

郡將候潛、值其酒熟、取頭上葛巾漉酒、畢還復著之。

義熙ぎぎの末、著作佐郎に徵めさるるも、就つかず。江州刺史王弘之を識しらんと欲するも、致いたす能はざるなり。潛嘗つらに廬山に往く。弘は潛の故人龐通之をして酒を齎もたらして半道の栗里に具そなへて之を要へしむ。潛に脚疾有れば、一門生二兒をして籃輿らんよを擧あげしむ。既に至るや、欣然と

して便ち共に飲酌す。俄頃にはかにして弘至るも、亦た忤むること無きなり。

是より先、顏延之は劉柳の後軍功曹と爲りて、尋陽に在り、潛と情款あり。後に始安郡と爲りて、經過するに、日日潛に造り、往く毎に必ず酣飲して醉を致す。去るに臨み、二萬錢を留めて潛に與ふ。潛は悉く酒家に送り、稍に就きて酒を取る。

嘗て九月九日に酒無く、宅邊の菊叢の中に出でて坐すること久し。弘酒を送りて至るに値ひ、即便ち就きて酌み、酔ひて後に歸る。

潛は音聲を解せざるも、而も素琴一張を畜ふ。絃無し。酒の適する有る毎に、輒ち撫弄して以て其の意を寄す。

貴賤の之に造る者、酒有れば輒ち設く。潛若し先に酔へば、便ち客に語る「我酔ふ眠らんと欲す、卿去る可し」と。其の眞率なること此の如し。

郡將 潛を候ひ、其の酒の熟するに値へば、頭上の葛巾を取りて酒を漉し、畢れば還つて復た之を著く。

【語釈】

「江州刺史王弘」王弘は三七九〜四三二。劉裕の股肱の臣。『宋書』四二、「南史」二二。

「潛故人龐通之」『晉書』本傳には「其の郷親の張野、及び周旋人の羊松齡、龐遵らは、酒有れば之を要へ、或いは之を要へて共に酒坐に至る」とある。

「顏延之爲劉柳後軍功曹、在尋陽」「顏延之」(三

八四〇四五六）は、淵明の忘年の友。劉柳の後軍功曹になつたのは義熙十一年（四一五）三一歳。時に淵明は五一歳。「劉柳」は、？〇四一六。

〔後爲始安郡〕顔延之が始安太守になつたのは、永初三年（四二二）三七歳。淵明は五七歳。

〔嘗九月九日無酒、出宅邊菊叢中坐久〕淵明の「九日閑居」詩の序に「余は閑居して、重九の名を愛す。秋菊は園に滿つるも、醪さかを持するに由靡し。空しく九華を服し、懷なつひを言に寄す」とある。

〔我醉欲眠、卿可去〕李白「山中與幽人對酌」に「兩人對酌山花開、一杯一杯復一杯。我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來」（兩人對酌すれば山花開く、一杯一杯復た一杯。我醉ふ眠らんと欲す、卿且く去れ、明朝意有らば琴を抱きて來れ）とある。

〔訳〕義熙きぎの末、著作佐郎に徵めされたが、就つかなかつた。江州刺史の王弘は潜と識り合いになろうとしたが、招くことができなかつた。潜は常に廬山に往つていた。弘は潜の友人の龐通ぼうちゆう之に酒を用意して途中の栗里で潜を待ちうけさせた。潜には脚疾あしびが有つたので、一門生と二兒に籃輿らんごを輦かがせていた。潜はやつてくると、欣然としてさっそく龐通ぼうちゆう之と飲みはじめた。暫くすると王弘がやつてきたが、潜は亦た嫌な顔をすることはなかつた。

是より先、顔延之は劉柳の後軍功曹と爲つて尋陽に在り、潜と好みを通じていた。その後、始安郡太守となつ

て、尋陽を通つた時には、日日潜の所に行き、その度に必ず酣飲して酔つた。去るに臨んで二萬錢を留めて潜に與えた。潜はそれを悉く酒家に送り、時に立ち寄つては酒を飲んだ。

嘗て九月九日に酒が無く、宅邊の菊叢の中に出て長いこと坐つていた。ちよと王弘が寄越した酒が届いたので、早速就つきて酌しやくみ、酔うてから家に歸つた。

潜は音聲を解とけなかつたが、粗末な琴を一張た畜くわえていた。絃しんは無かつた。酒に酔うたびに、いつも琴を撫弄なでて其の意を寄せた。

貴賤にかかわらず訪ねて來た者には、酒が有ればいつも用意した。若し潜が先に酔えば、すぐに客に言つた「私は酔つたので眠りたい、卿きみ歸りたまえ」と。其の率直であることはこのようであつた。

郡將が潜を訪ねたときなど、其の酒がちよと熟しておれば、頭上の葛巾かきんを脱いで酒を漉し、畢はると復たそれを被つた。

#### （四）

潜弱年薄宦、不潔去就之迹。自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代。自高祖王業漸隆、不復肯仕。所著文章、皆題其年月、義熙以前、則書晉氏年號、自永初以來唯云甲子而已。

潜は弱年にして薄宦となり、去就の迹をい潔きよくせず。自ら曾祖は晉の世の宰輔なるを以て、復た身を後代に屈

するを恥づ。高祖の王業、漸く隆んなる自り、復た仕ふるを肯ぜず。著す所の文章は、皆な其の年月を題するも、義熙以前は、則ち晉氏の年號を書し、永初より以來は唯だ甲子を云ふのみ。

【語釈】

「不潔去就之迹」官に就いてもすぐに止めたり、止めたのかと思つてゐると又た就いたりしたことを指す。自分はこんな「薄宦」に甘んじてゐる存在ではない、と思つと腰が落ち着かなくなつて止めてしまふ。「去就の迹を深く」したのは「歸田」の際だけであつた。

「恥復屈身後代」自分の代になつて、身を「薄宦」（州の祭酒、州の主簿（不就）、鎮軍參軍、建威參軍、彭澤令）に屈してゐることを恥じた。

「高祖王業漸隆」「高祖」（劉裕）は、東晉末の義熙年間（四〇五〜四一八）には、北伐を開始して洛陽、ついで長安を陥落させて後秦を滅ぼし、義熙十四年には宋公となつてゐる。淵明は五十四歳。このころ著作佐郎に徴されたが辞退した。

「永初」宋初の年号。四二〇〜四二二。

「甲子」干支。

【訳】

潜は若い頃、低い官職に就いたが、それらに腰を落ち着けることはなかつた。自分では曾祖父（陶侃）が晉の世の宰輔であつたことで、復た自分の代に身を低い官職に就くことを恥ぢたのだ。

高祖（劉裕）の王業が次第に隆んになつてからは、復た仕えようとはしなかつた。著した文章には、皆な其の年月を記し、義熙以前は則ち晉氏の年號を書いていたが、永初より後は唯だ甲子を記すだけであつた。

與子書以言其志、并爲訓戒曰、

子に書を與へて以て其の志を言ひ、並びに訓戒を爲して曰く、

【語釈】

「并爲訓戒曰」「本集」には「子の儼らに與ふる疏」として收められてゐる。

【訳】

子に書を與へて自分の志を言ひ、並びに訓戒を爲して次のように言つた。

①天地賦命、有往必終。自古賢聖、誰能獨免。子夏言

曰、死生有命、富貴在天。四友之人、親受音旨。發斯談者、豈非窮達不可妄求、壽夭永無外請故邪。

天地命を賦し、往く有れば必ず終る。古へ自り賢聖も、誰か能く獨り免れん。子夏言ひて曰く、「死生、命有り、富貴、天に在り」と。四友の人、親しく音旨を受く。斯の談を發するは、豈に窮達妄りに求む可からず、壽夭永く外請無きが故に非ず邪。

②吾年過五十、而窮苦荼毒。以家貧弊、東西遊走。性剛才拙、與物多忤。自量爲己、必貽俗患。僂俛辭世、使汝幼而飢寒耳。

吾が年五十を過ぎ、而も窮苦荼毒。家の貧弊なるを以て、東西に遊走す。性は剛才は拙なれば、物と忤ふこと多し。自ら量るに己の爲に、必ず俗患を貽さんと。僂俛世を辭し、汝ら幼をして飢寒ならしむる耳。

③常感孺仲賢妻之言、敗絮自擁、何慚兒子。此既一事矣、但恨隣靡二仲、室無萊婦。抱茲苦心、良獨罔罔。常て孺仲が賢妻の言に感ず、「敗絮自ら擁す、何ぞ兒子を慚ぢん」と。此れ既に一事なり、但だ恨む隣に二仲靡く、室に萊婦無きを。茲の苦心を抱き、良に獨り罔罔たり。

④少年來好書、偶愛閑靜。開卷有得、便欣然忘食。見樹木交蔭、時鳥變聲、亦復歡爾有喜。嘗言五六月北窗下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。

少年來り書を好み、偶ま閑靜を愛す。卷を開きて得る有れば、便ち欣然として食を忘る。樹木蔭を交へ、時鳥聲を變ずるを見るや、亦た歡爾として喜ぶ有り。嘗て言ふ五六月北窗の下に臥し、涼風の暫く至るに遇へば、自ら謂へらく「是れ羲皇上の人なり」と。

⑤意淺識陋、日月遂往。緬求在昔、眇然如何。疾患以

來、漸就衰損。親舊不遺、每以藥石見救、自恐大分將有限也。

意は淺く識は陋く、日月遂に往く。緬かに在昔を求むるも、眇然如何んせん。疾患以來、漸く衰損に就く。親舊遺れず、毎に藥石を以て救はる。自ら大分の將に限り有らんとするを恐る。

⑥恨汝輩稚小、家貧無役、柴水之勞、何時可免。念之在心、若何可言。

恨むらくは汝輩の稚小にして、家は貧にして役無く、柴水の勞、何れの時か免る可き。之を念ひて心に在り、若何ぞ言ふ可けんや。

⑦然雖不同生、當思四海皆弟兄之義、鮑叔敬仲、分財無猜。歸生伍舉、班荆道舊、遂能以敗爲成、因喪立功。他人尚爾、況共父之人哉。

然れど同生ならずと雖も、當に四海皆な弟兄の義を思ふべし。鮑叔敬仲は、財を分かちて猜ひ無し。歸生伍舉、荆を班きて舊を道ひ、遂に能く敗を以て成と爲し、喪に因りて功を立つ。他人すら尚ほ爾り、況んや父を共にするの人なるを哉。

⑧潁川韓元長、漢末名士。身處卿佐、八十而終。兄弟同居、至于沒齒。濟北氾稚春、晉時操行人也。七世

同財、家人無怨色。

潁川の韓元長は、漢末の名士なり。身は卿佐に處り、八十にして終る。兄弟同居し、齒を没するに至る。濟北の汎稚春は、晉時操行の人なり。七世財を同じうするも、家人に怨む色無し。

⑨詩云高山仰止、景行行止。汝其慎哉、吾復何言。

詩に云ふ高山は仰止ぎ、景行は行止くと。汝其れ慎まんなかな、吾復た何をか言はん。

#### 【語釈】

「天地賦命」この句の前に、本集には「告儼俟份佚佟」（儼、俟、份、佚、佟に告ぐ）六字がある。

「有往必終」本集は「生必有死」（生まるれば必ず死有り）に作る。

「子夏言曰、死生有命、富貴在天」『論語』顔淵篇に「子夏曰く、商之を聞く、死生命有り、富貴天に在り」と。「言曰」二字、本集は「有言」に作る。

「四友之人、親愛音旨」「四友」は、顔回、子貢、子張、子路を指す。彼らは孔子から親しく教えを受けた人たち。

「發斯談者」死生、富貴、窮達、壽夭などを談ずる者たちをいう。

「豈非窮達不可妄求」「豈」字、「本集」は「將」に作る。

「外請」外からの請求。人頼み。

「而窮苦荼毒」「本集」は「少而窮苦」に作る。

「以家貧弊」「本集」は「每以家弊」に作る。

「與物多忤」他人と調子を合わせるができない。

「自量爲己、必貽俗患」「物と忤ふこと多き」が故に、つまらないことで家族に迷惑をかけることが多くなるであらうと。

「黽俛辭世」「黽俛」は、努め励むこと。何とかして俗世間から離れようとした。

「使汝幼而飢寒耳」「本集」は「汝」の下に「等」字あり、「耳」字無し。

「常感孺仲賢妻之言」「孺仲」は「儒仲」の誤り。後漢の逸民王霸の字。王霸が、我が子の「蓬髮歴齒、未だ禮

を知らざる」を慚じているのを見た妻が、「君少くして清節を修め、榮祿を顧みず。君躬ら勤苦す。子安くんぞ耕して以て養はざるを得ん、安んぞ黄頭歴齒ならざるを得んや。奈何ぞ宿志を忘れて、兒女子を慚ずるや」と。

霸は屈し起ちて笑うて曰く「是れ有る哉」と。遂に共に終身隠遁す。『列女傳』第二「本集」は「常」の上に「余」字あり。

「室無萊婦」『列女傳』楚の老萊子と其の妻の話を踏まえる。楚王のもとに出仕せんとする老萊子に妻が言うには

「妾之を聞く、食酒肉を以てす可き者は、隨ふに鞭捶を以てすべし。授くるに官祿を以てすべき者は、隨ふに鈇鉞を以てすべし。今先生、人の酒肉を食ひ、人の官祿を受

く。此れ皆人の制する所なり。亂世に居り、人の制する所と爲る。能く患を免れんや」と。老萊子遂に其の妻を

隨へ、江南に至りて止まる。

隨へ、江南に至りて止まる。

「良獨罔罔」「罔罔」二字、「本集」は「内愧」に作る。

「少年來好書」「本集」は「少學琴書」に作る。

「便欣然忘食」「論語」述而篇に「子曰く、女奚ぞ日はざる、其の人と爲りや、憤りを發して食を忘れ、樂しんで以て憂ひを忘ると」とある。

「亦復欲爾有喜」「爾」字、「本集」は「然」に作る。

「嘗言五六月」本集は「月」下に「中」字あり。

「義皇上人」「義皇」は、帝王伏羲のこと。「上人」は、その頃の人。

「意淺識陋」「陋」字、「本集」は「罕」に作る。この句の下、本集には「謂斯言可保」（謂へらく斯の言保つ可し）の句有り。

「日月遂往」この句の下、「本集」は「機巧好疎」（機巧好だ疎なり）の句あり。

「恨汝輩稚小」「恨」字、「本集」には無し。

「家貧無役」「無」字、「本集」は「毎」に作る。「役」は、使用人。手伝いの人。

「然雖不同生」「本集」は「然汝等雖曰同生」に作り、校記に「曰、一作不」とある。

「四海皆弟兄」「論語」顔淵篇に「子夏曰く、四海の内、皆な兄弟なり。君子何ぞ兄弟無きを患へんや」とある。

「鮑叔敬仲、分財無猜」「敬」字、「本集」は「管」に作る。詳細は『史記』管鮑列伝に見える。

「歸生伍舉」春秋時代の楚の伍舉と、その友人の歸生。

「班荊道舊」「班」は、數く。「荊」は雜草。襄公二十六

年の『左氏傳』に、亡命しなければならなくなった伍舉に、鄭の郊外で歸生が会い、草を敷いて伍舉の歸國の方法について相談したことを踏まえる。

「以敗爲成」管仲についていう。管仲は齊の公子糾に仕え、鮑叔は公子小白（後の桓公）に仕え、後継者争いの結果、小白が勝ったが、鮑叔の推薦で管仲は齊の相となった。

「因喪立功」伍舉は初め亡命せざるを得なかったが、後に歸生のおかげで國に歸り、功績を挙げるようになったのをいう。

「況共父之人哉」「共」字、「本集」は「同」に作る。

「潁川韓元長」後漢の韓融、字は元長。『後漢書』卷九〇に傳がある。

「身處卿佐」「卿佐」は、執政補佐の任。

「八十而終」「八」字、「本集」は「七」に作る。本傳には「獻帝の初、太僕に至り、年七十にして卒す」とある。

「濟北汜稚春、七世同財、家人無怨色」晉の汜毓、「稚春」は字。『晉書』卷九一に「毓に至るまで七世、時人は、其の家、兒に常の父無く、衣に常の主無しと言ふ」とある。

「高山仰止、景行行止」『詩經』小雅、車鞿の二句。高山は仰がれ、大道は行はる。この句の下、本集には「雖不能爾、至心尚之」（爾る能はずと雖も、至心之を尚べ）二句がある。

### 【訳】

子に書を與へて自分の志を言い、並びに訓戒を爲して

次のように言った。

- ① 生命は天地が與えたもので、生あれば必ず終る。古へより賢聖も、死を免れた者は獨りもない。子夏は言った、「死生 命有り、富貴 天に在り」と。孔子の「四友」の人たちは、親しくその教えを受けた。斯の談を發したのは、窮達は妄りに求めることはできず、壽夭はどこまでも人頼みのできないものだからではないか。
- ② 私は五十歳を過ぎたが、窮苦にして荼毒。家が貧弊なるゆえに、東へ西へと遊走した。性格が剛情で要領が悪く、人とぶつかることが多かった。思うに己の爲に必ず家族の皆に迷惑を及ぼすに違いないと。かくて勉めて世間と関わりを持たないようにしたので、お前たち幼い者たちを飢え凍えさせることになってしまった。
- ③ 嘗て王霸の賢妻の言葉に感じたことがある。「敗絮は自分の意志で着ているのだから、どうして兒子を慚がることがあるうか」と。これが隠棲の理由の一つであった。但だ隣に二仲が居らず、家には老萊子の婦もいなかったのが残念であった。この苦しい心を抱きつつ、良に獨り辛い思いをしている。
- ④ 少年の頃から読書を好み、偶々閑静を愛していた。巻を開いて心に得るもの有れば、便ち欣然として食を忘れたし、樹木が蔭を交えるようになり、時鳥の聲が變つてくれば、復た歡爾として喜んだものだ。嘗て言ったことがある、「五六月の頃 北の窗の下に臥し、涼風が暫く吹いてくると、羲皇の時の人の氣分にな

る」と

- ⑤ 思慮は淺く見識は陋いまま、月日は遂に過ぎ行く。細かに昔を求めても、眇然としてどうにもならない。疾患にかかつて以來、次第に身体は衰損えてゆく。親戚舊知は遣れずに、毎に藥石を以て救つてくれるが、自分では壽命が盡きんとしているのではと恐れている。
- ⑥ 恨むらくは お前たちが稚小く、家は貧しく人手は無く、家事手伝いの苦勞が無くなるのは何時のことか。このことが常に心に在り言う言葉も無い。
- ⑦ しかしながら同生ではないといつても、「四海は皆な兄弟」という言葉の意味を思うように。鮑叔と敬仲は、財を分け合つて猜うことは無かつたし、歸生と伍舉は、雜草を敷いて昔のことを話し合つた。かくて管仲は失敗を成功に換え、喪失に因つて功を立てた。他人同士でさえ此のようなのだ。まして父親を共にするものであれば 尚更のこと。
- ⑧ 潁川の韓元長は、漢末の名士。その身は卿佐であつて、八十歳で亡くなつたが、兄弟が同居して、死ぬまで一緒にいた。濟北の氾稚春は、晉時の操行正しい人であり、七世にわたつて財産を共有したが、家人は怨む色も見せなかつた。
- ⑨ 詩に云ふ「高山は仰がれ、景行は模範とされる」と。お前たちくれぐれも身を慎むように、私としてはこれだけを言つておきたい。

又爲「命子詩」以貽之曰、

又「子に命る詩」を爲りて以て之に貽りて曰く、

【詠】

又た「子に命る詩」を作り、それを貽つて言つた。

① 悠悠我祖、爰自陶唐。邈爲虞賓、歷世垂光。

御龍勤夏、豕韋翼商。穆穆司徒、厥族以昌。

悠悠たり我が祖、爰に陶唐に自る。

邈かに虞の賓と爲り、歷世光を垂る。

御龍は夏に勤め、豕韋は商を翼く。

穆穆たる司徒、厥の族より以て昌えたり。

② 紛紜戰國、漠漠衰周。鳳隱于林、幽人在丘。

逸虬撓雲、奔鯨駭流。天集有漢、眷予愍侯。

紛紜たる戰國、漠漠たる衰周。

鳳は林に隱れ、幽人は丘に在り。

逸虬は雲を撓こし、奔鯨は流れを駭かす。

天は有漢に集ひて、予が愍侯を眷りみる。

③ 於赫愍侯、運當攀龍。撫劍夙邁、顯茲武功。

書誓山河、啟土開封。豐豐丞相、允迪前蹤。

於赫ける愍侯、運は攀龍に當る。

劍を撫して夙に邁き、茲の武功を顯す。

書して山河に誓ひ、土を開封に啟く。

豐豐たる丞相は、允に前の蹤を迪む。

④ 渾渾長源、蔚蔚洪柯。羣川載導、衆條載羅。

時有默語、運固隆汗。在我中晉、業融長沙。

渾渾たり長き源、蔚蔚たり洪いなる柯。

羣川は載ち導かれ、衆條は載ち羅なる。

時に默すると語ると有り、運は固より隆になると

汗ると。

我が中晉に在りて、業は長沙に融く。

⑤ 桓桓長沙、伊勳伊德。天子疇我、專征南國。

功遂辭歸、臨寵不惑。孰謂斯心、而可近得。

桓桓たり長沙、伊れ勳あり伊れ德あり。

天子我に疇ひて、專ら南國を征たしむ。

功遂げて辭し歸り、寵に臨むも惑はず。

孰か謂ふ斯の心、而して近ごろにして得可しと。

⑥ 肅矣我祖、愼終如始。直方二臺、惠和千里。

於皇仁考、淡焉虛止。寄迹夙運、冥茲愠喜。

肅めるかな我が祖、終りを愼むこと始めの如し。

直きこと二臺に方び、恵みは千里を和ぐ。

於皇いなり仁なる考、淡焉くして虚止しく。

迹を夙運に寄せて、茲の愠喜を冥くす。

⑦ 嗟余寡陋、瞻望靡及。顧慚華鬢、負景隻立。

三千之罪、無後其急。我誠念哉、呱聞爾泣。



嗟余は寡陋にして、瞻望すれども及ばず。  
顧りみて華鬢を慚ぢ、景を負ひて隻り立つ。  
三千の罪、後の無きを其れ急とす。

我誠に念ふ哉、呱として爾の泣くを聞く。

⑧ト云嘉日、占爾良時。名爾曰儼、字爾求思。

温恭朝夕、念茲在茲。尚想孔伋、庶其企而。

トして云に嘉き日、占ひて爾れ良き時。

爾に名けて儼と曰ひ、爾に字して求思といふ。

朝夕に温恭なれ、茲を念ふこと茲に在てせよ。

尚ほ想ふ孔伋に、庶はくは其れ企はんことを。

⑨厲夜生子、遽而求火。凡百有心、奚待于我。

既見其生、實欲其可。人亦有言、斯情無假。

厲夜に子を生めば、遽かに火を求む。

凡百心有り、奚ぞ我を待たんや。

既に其の生まれたるを見、實に其の可ならんことを欲す。

を欲す。

人も亦た言有り、斯の情假無しと。

⑩日居月諸、漸免于孩。福不虛至、禍亦易來。

夙興夜寐、願爾斯才。夙に興き夜に寐ねよ、

爾之不才、亦已焉哉。

日や月や、漸く孩より免れしめん。

福は虚しくは至らず、禍は亦た來たり易し。

願はくは爾斯れ才あらんことを。  
爾にして之れ不才ならんか、亦た已んぬる哉。

潜元嘉四年卒。時年六十三。

潜は元嘉四年に卒す。時に年は六十三。

### 【語釈】

\*「命子詩」が作られたのは長子の儼が生まれた時であるから、淵明二八歳の頃の作と推定される。

「陶唐」堯帝。陶氏の祖先は陶唐氏であるという。漢、韋孟「諷諫詩」に「肅肅たる我が祖、國すること豕韋に自まる」とある。

「虞賓」「虞」は、有虞氏、舜帝。「賓」は、賓客。堯の子の丹朱は舜帝の客分として待遇された。

「歷世垂光」徳の有る人が代々出てきた。「垂」字、本集は「重」に作る。

「御龍・豕韋」いずれも唐氏一族の姓。「御龍」は、夏の劉累。「豕韋」は、殷代の人。

「穆穆」敬しむさま。温和なるさま。

「司徒」官名。周代、六卿の一。教育を司る。陶叔は周の司徒となった。

「厥族以昌」陶叔が司徒となつてから、陶族は世に顕れた。

「紛紜戰國」「紛紜」は、入り亂れたさま。周が衰えてより天下は亂れて戰國となった。「紜」字、本集は「紛」に作る。

「漠漠哀周」「漠漠」は、掴み所のないさま。周の衰えた時代をいう。

「鳳隱于林」鳳凰は治世に現れ、亂世には隠れるという。

「論語」子罕篇に「鳳鳥は至らず、河は圖を出さず、吾已んぬるかな」と。

「幽人在丘」「幽人」は、隱者。内に道を藏している人。

「周易」履卦に「道を履んで坦坦、幽人貞吉」と。

「逸虬撓雲、奔鯨駭流」「虬」は、みずち。角のない龍。亂暴者の暴れ回ることをいう。

「天集有漢」天命が周、秦を離れて漢に就いたこと。

「眷予愍侯」陶舍は漢の高祖に従い、燕、代を伐つて功績があり、開封侯に封ぜられ、愍と諡された。『漢書』高帝功臣表。

「於赫愍侯」「諷諫詩」に「於赫ける有漢」とある。

「運當攀龍」「運」は、時運。「攀龍」は、龍につかまると登ること。英主に従つて功を立てることをいう。『後漢書』光武紀に「士大夫の、大王に矢石の間に従ひしは、固より龍鱗に攀ち鳳翼に附きて、以て其の所志を成さんことを望むのみ」とある。

「撫劍夙邁、顯茲武功」陶舍が漢王の五年から既に從軍していること。

「參誓山河」「漢書」高惠高后文功臣表の序に、高帝が功臣に封爵する時の「丹書の信」「白馬の盟」として知られている。「封爵の誓いに曰く、黄河をして帶の如く、泰山をして厲の若からしむるも、國は以て永く存し、爰に

苗裔に及ぼさんと。是に於て申ぬるに丹書の信を以てし、重ぬるに白馬の誓を以てす」と。「參」字、本集は「書」に作る。

「啟土開封」「啟土」は、領地を拓げること。陶舍が開封侯に封ぜられたことをいう。『尚書』武成に「惟れ先王、國を建て土を啓く」と。

「疊疊丞相」「疊疊」は、倦まず勤めるさま。『詩經』大雅、文王に「疊疊たる文王」と。陶青は漢の景帝の二年から七年まで丞相であった。

「允迪前蹤」「前蹤」は、先祖の歩んだ道。『尚書』皋陶謨に「允に厥の徳を迪む」と。

「渾渾長源」流れて盡きないさま。

「蔚蔚洪柯」「蔚蔚」は、こんもりと茂っているさま。

「羣川載導、衆條載羅」前句は「渾渾長源」を承け、後句は「蔚蔚洪柯」を承ける。陶姓の分家が多くできたことを言う。

「時有默語」陶氏には時に応じて仕える者、仕えない者があつたことをいう。『周易』繫辭傳上に「君子の道、或いは出で或いは處り、或いは語り或いは黙す」とある。

「默語」二字、本集は互倒して「語默」に作る。

「運固隆汗」時運に盛衰があつたことをいう。本集は「固」字を「因」に、「汗」字を「蜜」に作る。

「在我中晉」「中晉」は、東晉のこと。

「業融長沙」その功績は長沙に輝いた。

「桓桓長沙」長沙侯は淵明の曾祖父侃のこと。東晉に仕え

て長沙公に封ぜられ、桓と諡された。「桓桓」は、威風有るさま。『詩経』周頌、桓に「桓桓たる武王」とある。

「天子疇我、專征南國」天子が長沙公に南方征伐の事を相談された。『尚書』堯典の「疇咨若時登庸」（疇か時に若ふを咨ひ登庸せん）に拠るのである。『我』は、長沙公。「專征南國」は、蘇峻、祖約の反亂を討伐したことをいう。「南國」は、歷陽をいう。

「功遂辭歸」官職を辞して郷里に歸った。『老子』第九章に「功遂げて身退くは、天の道なり」と。

「臨寵不惑」寵命を受けたが「辭歸」の思いを変えなかつた。「惑」字、本集は「忒」に作る。心変わりしない」と。「孰謂斯心、而可近得」このような心は、近頃の人には見られない。

「肅矣我祖」陶淵明の祖父陶茂のこと。武昌太守であつた。

「慎終如始」『老子』第六四に「終りを慎むこと始めの如くせば、事を敗る無し」と。

「直方二臺」「方」は、比すること。「二臺」は、丞相陶青と長沙公陶侃のことか。

「惠和千里」「千里」は、千里四方。郡の治める範囲。祖父の茂が武昌太守として善政を布いたこと。

「於皇仁考」「皇」は、偉大。「考」は、亡父の美称。名は不明。

「淡焉虛止」「淡焉」は、名利に淡泊なさま。「虛止」は、虚心。「焉・止」は助辞。

「寄迹夙運」自然の中に身を託し、俗世間を避けたことをいう。「夙」字、本集は「風」に作る。

「冥茲愠喜」「冥」字、『本集』は「眞」に作る。「茲の愠喜を眞く」。

「瞻望靡及」父祖の如くありたいと望むも、及びもつかない。『詩経』邶風、燕燕に「瞻望するも及ばず、泣涕は雨の如し」と。

「負景隻立」後漢、崔駰「達旨」に「影を抱いて特り立ち、土と羣せず」とある。

「三千之罪」「孝經」五刑に「五刑の屬三千、罪は不孝より大なるは無し」とある。人間の犯す多くの罪。

「無後其急」「無後」は、後継ぎの無いこと。『孟子』離婁下に「不孝に三有り、後無きを大と爲す」と。

「卜云嘉日、占爾良時」「卜」は、龜の甲を焼き、その割れ目によつて吉凶を判断すること。

「名爾曰儼」「禮記」曲禮上に「儼として思ふ若し」と。注に「儼は、矜莊の貌」とある。

「溫恭朝夕」「詩経」商頌、那に「温やかに、恭し朝夕に、事を執りて恪しむ有り」と。

「念茲在茲」「溫恭朝夕」ということを忘れないように、ということ。『尚書』大禹謨に「茲を念ふ茲に在てす」とある。

「尚想孔伋」孔子の孫、名は子思、字は伋。子の字を求思としたわけを言う。

「庶其企而」「企」は企及の意。「而」は助辞。

「厲夜生子」「厲」は、癩病。『莊子』天地篇に「厲の人は、夜半に子を生めば、遽かに火を取りて之を視る。汲汲然として唯だ其の己に似ることを恐るるなり」と。

「日居月諸、漸免于孩」月日が経つに従つて、やがて成人となることだろ。 「居・諸」は助辞。『詩經』邶風、日月に「日居月諸、東方より出づ。父や母や 我を畜ひて卒へず」とある。

「福不慮至、禍亦易來」『淮南子』謬稱訓に「行ひ合して名は之に副ふ。禍福は虚しくは至らず」とある。

「夙興夜寐、願爾斯才」『詩經』小雅、小宛に「夙に興き夜に寐ね、爾が所生を忝かしむる無かれ」とある。

「爾之不才、亦已焉哉」『詩經』衛風、氓に「反是不思、亦已焉哉」（反せんことを是れ思はざりき、亦た已んぬる哉）とある。

\* 詩に従えば陶氏の系譜は次のようになる。

陶唐（堯）——御龍（夏）——豕韋（殷）——陶叔（周）——陶舍（漢、高祖）——陶青（漢、景帝）——陶回（晉）——陶丹——陶侃——陶 茂——〇——淵明

【訳】

① 悠悠なることよ、我が祖先、陶唐の世から始まった。遼かに虞舜の客分となり、歴世光を垂れた。

御龍は夏に勤め、豕韋は商を翼けた。

穆穆たる司徒陶叔の時から、厥の陶氏は昌えたのだ。

② 紛紜と亂れた戦國の世、漠漠たり衰えし周王朝。鳳凰は林に隠れ、幽人は丘に在った。

逸虬は雲を撓こし、奔鯨は流れを駭かした。

③ 天命は漢に集ひ、我が愍侯陶舍が恩寵を受けた。於 赫かしき愍侯、運は攀龍に當つていた。

漢王は山河に誓つて、新たに領地を與えられた。響壘として勤めた丞相陶青は、誠に御先祖の蹤を歩んだ。

④ 渾渾として流れる長き源、蔚蔚と茂る洪いなる柯。羣川はそこから導かれ、衆くの條はそこから分れた。

時によつて進退はさまさま、運には盛衰が有つた。我が東晉の世に在つて、功業を長沙公が融かした。

⑤ 桓桓と威風有る長沙公、勳功はあり徳もあつた。天子は指名されて、専ら南國を征たしめられた。

功遂げて辭し歸り、恩寵に臨むも感いはなかつた。孰か謂わん 斯の心、近ごろにして得可きものと。

⑥ 肅めるかな、我が祖父、終りを慎むこと始めの如く。直きことは先祖の二人に方び、その恵みは千里を和

けた。於 皇いなり 仁なる父、淡泊にして虚心。

行動を夙運に寄せて、喜怒哀樂を冥くする。

⑦ 嗟、私は寡陋であつて、瞻望んでも及ばぬこと。顧りみて華鬢を慚ぢ、影を負つて隻り立つている。

三千の罪のうち、後の無いことが最も重い。私は誠にそれを念つていたが、呱として爾の泣声を聞いた。

⑧トえばそれは嘉き日、占えばこれは良き時。

爾に名けて儼と曰ひ、爾に字して求思といふ。

朝夕に温恭であれ、茲を念えば茲に在てす。

尚ほ想ふ孔伋に、庶はくは其れ企はんことを。

⑨厲の人が夜に子を生めば、遽かに火を求めぬ。

全ての親にその心は有り、どうして私だけのことであろうか。

既に其の生まれたのを見、實に立派に育てよと思う。

人も亦た言っている、子を思う情に假無しと。

⑩日が過ぎ月が過ぎて、次第に生育してくる。

福は虚しくは至らないし、禍は亦た來たり易い。

朝早く興き夜も励め、願はくは爾に才あらんこと。

爾がもし不才であれば、それも亦た仕方のないこと。

潜元嘉四年卒。時年六十三。

潜は元嘉四年に卒した。時に年は六十三。

### 『晉書』卷九四 陶潛傳

(一)

陶潛字元亮、大司馬侃之曾孫也。祖茂、武昌太守。潛少懷高尚、博學善屬文、穎脫不羈、任真自得、爲鄉鄰之所貴。嘗著「五柳先生傳」以自況曰、

先生不知何許人、不詳姓字、宅邊有五柳樹、因以爲號焉。閑靜少言、不慕榮利。好讀書、不求甚解、每有會

意、欣然忘食。性嗜酒、而家貧不能恒得。親舊知其如此、或置酒招之、造飲必盡、期在必醉、既醉而退、曾不吝情。環堵蕭然、不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也。常著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終。

〔造飲必盡〕「必」字、『宋書』は「輒」に作る。

〔曾不吝情〕「情」下、『宋書』は「去留」二字がある。

〔短褐穿結〕「短」字、『宋書』は「短」に作る。

其自序如此、時人謂之實錄。

陶潛字は元亮、大司馬侃の曾孫なり。祖は茂、武昌太守。潛は少くして高尚を懷き、博學にして善く文を屬る。穎脫にして不羈、任真自得し、郷鄰の貴ぶ所と爲る。嘗て「五柳先生傳」を著し、以て自ら況ふと曰ふ。

〔五柳先生傳〕書き下し文は省略

其の自ら序ぶること此の如く、時人之を實録と謂ふ。

(二)

以親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸。州召主簿、不就、躬耕自資、遂抱羸疾。復爲鎮軍、建威參軍、謂親朋曰「聊欲絃歌、以爲三徑之資、可乎。」執事者聞之、以爲彭澤令。

在縣公田悉令種秫穀、曰「令吾常醉於酒足矣。」妻子固請種秬、乃使一頃五十畝種秬、五十畝種秬。素簡貴、不私事上官。郡遣督郵至縣。吏白應束帶見之、潛歎曰「吾不能爲五斗米折腰、拳拳事郷里小人邪」

親老い家貧しきを以て、起ちて州の祭酒と爲るも、吏職に堪へられず、少日にして自ら解きて歸る。州は主簿に召すも、就かず。躬ら耕して自ら資し、遂に羸疾を抱く。復た鎮軍、建威參軍と爲る。親朋に謂ひて曰く、「聊か絃歌せんと欲す。以て三徑の資と爲さん、可なる乎」と。執事者は之を聞き、以て彭澤令と爲す。

縣の公田に在て、悉く秫穀を種えしめんとす。曰く「吾をして常に酒に酔はしむれば足れり」と。妻子固く秫を種えんことを請へば、乃ち一頃五十畝に秫を種えしめ、五十畝に秠を種ふ。

素より簡貴にして、私に上官に事へず。郡は督郵を遣して縣に至らしむ。吏は應に束帶して之に見ゆべしと白へば、潛は歎じて曰く、「吾は五斗米の爲に腰を折る能はず。拳拳として郷里の小人に事へん邪」と。

(三)

義熙二年、解印去縣、乃賦歸去來。其辭曰、

歸去來兮、田園將蕪、胡不歸。既自以心爲形役、奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫、知來者之可追。實迷途其未遠、覺今是而昨非。舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣。問征夫以前路、恨晨光之希微。

乃瞻衡宇、載欣載奔、僮僕來迎、稚子候門。三徑就荒、松菊猶存。攜幼入室、有酒盈樽。引壺觴以自酌、眄庭柯以怡顏。倚南窗以寄傲、審容膝之易安。園日涉而成趣、門雖設而常關。策扶老而流憩、時翹首而遐觀。雲

無心而出岫、鳥倦飛而知還。景翳翳其將入、撫孤松而盤桓。

歸去來兮、請息交以絕游、世與我而相遺、復鴛言兮焉求。悅親戚之情話、樂琴書以消憂。農人告余以暮春、將有事乎西疇。或命巾車、或棹孤舟、既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮、泉涓涓而始流、善萬物之得時、感吾生之行休。

已矣乎。寓形宇內復幾時、曷不委心任去留、胡爲乎遑欲何之。富貴非吾願、帝鄉不可期。懷良辰以孤往、或植杖而芸籽、登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。聊乘化而歸盡、樂夫天命復奚疑。

「田園將蕪」「宋書」は「園田荒蕪」に作る。

「舟遙遙以輕颺」「遙遙」「宋書」は「超遙」に作る。

「僮僕來迎」「迎」字、『宋書』は「歛」に作る。

「有酒盈樽」「盈」字、『宋書』は「停」に作る。

「策扶老而流憩」「憩」字、『宋書』は「愒」に作る。

「農人告余以暮春」「暮」字、『宋書』は「上」に作る。

「既窈窕以尋壑」「尋」字、『宋書』は「窮」に作る。

「曷不委心任去留」「曷」字、『宋書』は「奚」に作る。

「懷良辰以孤往」「晨」字、『宋書』は「辰」に作る。

「或植杖而芸籽」「芸」字、『宋書』は「耘」に作る。

義熙二年、印を解きて縣を去り、乃ち「歸去來」を賦す。其の辭に曰く、

(「歸去來兮辭」の書き下し文は省略)

(四)

頃之、微著作郎、不就。既絶州郡謁、其鄉親張野及周旋人羊松齡寵遵等、或有酒要之、或要之共至酒坐。雖不識主人、亦欣然無忤、酣醉便反。未嘗有所造詣、所之唯至田舍及廬山游觀而已。

刺史王弘以元熙中臨州、甚欽遲之、後自造焉。潛稱疾不見、既而語人云「我性不狎世、因疾守閑、幸非潔志慕聲、豈敢以王公紆軫爲榮邪。夫謬以不賢、此劉公幹所以招謗君子、其罪不細也。」

弘每令人候之、密知當往廬山、乃遣其故人龐通之等齎酒、先於半道要之。潛既遇酒、便引酌野亭、欣然忘進。弘乃出與相見、遂歡宴窮日。

潛無履、弘顧左右爲之造履。左右請履度、潛便於坐申脚令度焉。弘要之還州、問其所乘、答云「素有脚疾、向乘籃輿、亦足自反。」乃令一門生二兒共輦之至州、而言笑賞適、不覺其有羨於華軒也。

弘後欲見、輒於林澤間候之。至於酒米乏絕、亦時相贖。

之を頃くして、著作郎に徴さるるも、就かず。既にして州郡の謁を絶つ。其の郷親なる張野、及び周旋人の羊松齡、寵遵らは或いは酒有れば之を要ひ、或いは之を要ひて共に酒の坐に至る。主人を識らずと雖も、亦た欣然として忤ること無く、酣醉すれば便ち反る。未だ嘗て造詣する所有らず、之く所は唯だ田舍及び廬山に至りて游觀するのみ。

刺史の王弘は、元熙中を以て州に臨み、甚だ欽びて之を遲ち、後自ら焉に造る。潛は疾と稱して見はず、既にして人に語りて云ふ「我は性世に狎れず、疾に因りて閑を守る。幸ひに志を潔くし聲を慕ふには非ず、豈に敢へて王公の軫を紆らすを以て榮と爲さん邪。夫れ謬くに不賢を以てするは、此れ劉公幹の謗りを君子に招く所以にして、其の罪細かならず」と。

弘は毎に人をして之を候はしめ、密かに當に廬山に往くべきを知り、乃ち其の故人龐通之らを遣はして酒を齎し、先に半道に於て之を要ふ。潛既に酒に遇ふや、便ち引きて野亭に酌み、欣然として進むを忘る。弘乃ち出でて與に相見、遂に歡宴して日を窮む。

潛履無し、弘は左右を顧みて之が爲に履を造らしむ。左右履の度を請ふ、潛は便ち坐に於て脚を申し度らしむるなり。弘は之を要へて州に還らんとし、其の乗る所を問ふに、答へて云ふ「素より脚疾有れば、向ころより籃輿に乗る。亦た自ら反るに足る」と。乃ち一門生と二兒をして、共に之を輦はしめて州に至り、而して言笑賞適して、其の華軒有るを羨むを覺えざるなり。

弘は後に見はんと欲すれば、輒ち林澤の間に於て之を候つ。酒や米の乏絶するに至れば、亦た時に相贖る。

(五)

其親朋好事、或載酒肴而往、潛亦無所辭焉。每一醉、則大適融然。

又不營生業、家務悉委之兒僕。未嘗有喜愠之色、惟遇

酒則飲、時或無酒、亦雅詠不輟。嘗言夏月虛閑、高臥北窗之下、清風颯至、自謂羲皇上人。

性不解音、而畜素琴一張、絃徽不具。每朋酒之會、則撫而和之、曰「但識琴中趣、何勞絃上聲。」

以宋元嘉中卒、時年六十三、所有文集並行於世。

其の親朋の事を好むもの、或いは酒肴を載せて往き、潜も亦た辭する所無し焉。一たび酔ふ毎に、則ち大いに適して融然たり。

又た生業を營まず、家務は悉く之を兒僕に委ぬ。未だ嘗て喜愠の色有らず、惟だ酒に遇へば則ち飲み、時に或いは酒無ければ、亦た雅詠して輟めず。嘗て言ふ「夏月虚閑にして、北窗の下に高臥し、清風颯と至れば、自ら謂へらく、羲皇上の人なりと。」

性音を解せず、而るに素琴一張を畜へ、絃徽具へず。朋酒の會毎に、則ち撫して之に和して、曰く「但だ琴中の趣きを識るのみ、何ぞ絃上の聲を勞せんや。」

宋の元嘉中を以て卒す。時に年は六十三。有する所の文集、並びに世に行はる。

(一)  
『南史』卷七五—陶潛傳—

陶潛字淵明、或云字深明、名元亮。尋陽柴桑人、晉大司馬侃之曾孫也。少有高趣、宅邊有五柳樹、故常著「五

柳先生傳」云、

先生不知何許人、不詳姓字。閑靜少言、不慕榮利。

好讀書、不求甚解、每有會意、欣然忘食。性嗜酒、而家貧不能恒得。親舊知其如此、或置酒招之、造飲輒盡、期在必醉。既醉而退、曾不吝情去留。環堵蕭然、不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也。常著

文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終。

其自序如此。蓋以自況、時人謂之實錄。

陶潛字は淵明、或いは字は深明、名は元亮と云ふ。尋陽は柴桑の人。晉の大司馬侃の曾孫なり。少くして高趣有り。宅邊に五柳樹有り、故に常に「五柳先生傳」を著して云ふ、

(「五柳先生傳」は省略)

其の自から序ぶること此の如し。蓋し以て自ら況ふるなり。時人之を實録と謂ふ。

(二)

親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解而歸。州召主簿不就。躬耕自資、遂抱羸疾。江州刺史檀道濟往候之、偃臥瘠餒有日矣、道濟謂曰「夫賢者處世、天下無道則隱、有道則至。今子生文明之世、奈何自苦如此。」對曰「潛也何敢望賢、志不及也。」道濟饋以梁肉、麾而去之。

後爲鎮軍、建威參軍、謂親朋曰、「聊欲絃歌、以爲三徑之資、可乎。」執事者聞之、以爲彭澤令。不以家累自隨、



送一力給其子、書曰「汝旦夕之費、自給爲難、今遣此力、助汝薪水之勞。此亦人子也、可善遇之。」公田悉令吏種秬稻、妻子固請種粳、乃使二頃五十畝種秬、五十畝種粳。

親老い家貧しく、起ちて州の祭酒と爲るも、吏職に堪へず、少日にして自ら解きて歸る。州主簿に召すも就かず。

躬みづから耕して自ら資し、遂に羸疾るいしつを抱く。江州刺史の檀道濟往きて之に候するに、偃臥瘠餒えんごせきごうして日有り。道濟謂ひて曰く「夫れ賢者の世に處するや、天下に道無ければ則ち隱れ、道有れば則ち至る。今子は文明の世に生まるに、奈何ぞ自ら苦しむること此の如きや」と。對こたへて曰く「潜や何ぞ敢て賢を望まん。志及ばざるなり」と。道濟饋おくるに梁肉を以てするも、磨こして之を去らしむ。後に鎮軍、建威參軍と爲る。親朋に謂ひて曰く「聊か絃歌して、以て三徑の資と爲さんと欲す。可ならんか」と。執事者之を聞き、以て彭澤の令と爲す。

家累を以て自ら隨へず、一力を送りて其の子に給し、書して曰く「汝が旦夕の費、自ら給すること難しと爲す。今此の力を遣り、汝が薪水の勞を助けしむ。此れ亦た人の子なれば、善く之を遇すべし」と。

公田に悉く吏をして秬稻を種えしむ。妻子固く粳を種えんことを請へば、乃ち二頃五十畝に秬を種え、五十畝に粳を種えしむ。

(三)

郡遣督郵至縣、吏白應束帶見之。潛歎曰「我不能爲五斗米折腰向鄉里小人。」即日解印綬去職、賦歸去來以遂其志、曰、

田園將蕪胡不歸。既自以心爲形役兮、奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫、知來者之可追。實迷塗其未遠、覺今是而昨非。

舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣、問征夫以前路、恨晨光之熹微。乃瞻衡宇、載欣載奔、僮僕歡迎、弱子候門。三徑就荒、松菊猶存、攜幼入室、有酒盈樽。引壺觴而自酌、眄庭柯以怡顏、倚南牕而寄傲、審容膝之易安。園日涉而成趣、門雖設而常關。策扶老以流憩、時矯首而遐觀。雲無心以出岫、鳥勸飛而知還。景翳翳其將入、撫孤松而盤桓。

歸去來兮、請息交以絕遊、世與我而相遺、復駕言兮焉求。悅親戚之情話、樂琴書以消憂、農人告余以春及、將有事於西疇。或命巾車、或棹扁舟、既窈窕以窮壑、亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮、泉涓涓而始流、善萬物之得時、感吾生之行休。已矣乎、寓形宇內復幾時、曷不委心任去留、胡爲遑遑欲何之。富貴非吾願、帝鄉不可期。懷良辰以孤往、或植杖而芸耔。登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩、聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑。

郡督郵を遣かはして縣に至らしむ。吏は應まさに束帶して之

に見ゆべしと白ふ。潜歎じて曰く「我は五斗米の爲に腰を折りて、郷里の小人に向ふ能はず」と。即日印綬を解きて職を去り、「歸去來」を賦して以て其の志を遂ぐ。曰く、

(「歸去來分辭」は省略)

(四)

傲爲著作佐郎、不就。江州刺史王弘欲識之、不能致也。潜嘗往廬山、弘令潜故人龐通之齋酒具於半道栗里要之。潜有脚疾、使一門生、二兒舉籃轡。及至、欣然便共飲酌、俄頃弘至、亦無忤也。

先是、顔延之爲劉柳後軍功曹、在尋陽與潜情款。後爲始安郡、經過潜、每往必酣飲致醉。弘欲要延之一坐、彌日不得。延之臨去、留二萬錢與潜、潜悉送酒家稍就取酒。嘗九月九日無酒、出宅邊菊叢中坐久之。逢弘送酒至、即便就酌、醉而後歸。

潜不解音聲、而畜素琴一張。每有酒適、輒撫弄以寄其意。

貴賤造之者、有酒輒設。潜若先醉、便語客「我醉欲眠卿可去。」其眞率如此。郡將候潜、逢其酒熟、取頭上葛巾漉酒、畢還復著之。

潜弱年薄宦、不潔去就之迹。自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代、自宋武帝王業漸隆、不復肯仕。所著文章、皆題其年月。義熙以前、明書晉氏年號、自永初以來、唯云甲子而已。

義熙の末、傲して著作佐郎と爲すも、就かず。江州刺史王弘、之を識らんと欲するも、致す能はざるなり。潜は嘗に廬山に往けば、弘は潜の故人龐通之をして酒を齋して半道の栗里に具へ之を要へしむ。潜に脚疾有れば、一門生と二兒をして籃轡を舉げしむ。至るに及び、欣然として便ち共に飲酌す。俄頃にして弘至るも、亦た忤ふこと無きなり。

是より先、顔延之は劉柳の後軍功曹と爲り、尋陽に在りて潜と情款あり。後に始安郡と爲りて、潜を經過するや、往く毎に必ず酣飲して醉を致す。弘は延之を要へて坐を一にせんと欲するに、日に彌るも得ず。延之去るに臨み、二萬錢を留めて潜に與ふ。潜は悉く酒家に送り、稍に就きて酒を取る。

嘗て九月九日に酒無し。宅邊の菊叢中に出でて坐すること之を久しくす。弘の酒を送りて至るに逢ふ。即便ち就きて酌み、酔ひて後に歸る。

潜は音聲を解せざるに、而も素琴一張を畜ふ。酒の適する有る毎に、輒ち撫弄して以て其の意を寄す。

貴賤之に造る者、酒有れば輒ち設く。潜若し先に酔はば、便ち客に語る「我酔ひて眠らんと欲す。卿去る可し」と。其の眞率なること此の如し。

郡將潜に候し、其の酒の熟するに逢へば、頭上の葛巾を取りて酒を漉し、畢はれば還つて復た之を著く。

潜は弱年にして薄宦、去就の迹を潔くせず。自ら以へらく「曾祖は晉世の宰輔なれば、復た身を後代に屈す

るを恥づ」と。宋の武帝王業の漸く隆んなる自り、復た仕ふるを肯んぜず。著す所の文章は、皆な其の年月を題す。義熙以前は、明らかに晉氏の年號を書し、永初自り以來は、唯だ甲子を云ふ而已。

(五)

與子書以言其志、并爲訓戒曰、

吾年過五十、而窮苦荼毒。性剛才拙、與物多忤。自量爲己、必貽俗患。僂俛辭事、使汝幼而飢寒耳。

常感孺仲賢妻之言、敗絮自擁、何慚兒子。此既一事矣。但恨靡一仲、室無萊婦、抱茲苦心、良獨罔罔。

少來好書、偶愛閑靖、開卷有得、便欣然忘食。見樹木交蔭、時鳥變聲、亦復歡爾有喜。嘗言五六月北窗下臥、

遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。意淺識陋、日月遂往、疾患以來、漸就衰損。親舊不遺、每有藥石見救、自恐大分將有限也。

汝輩幼小、家貧無役、柴水之勞、何時可免。念之在心、若何可言。

然雖不同生、當思四海皆兄弟之義。鮑叔、敬仲、分財無猜、歸生、伍舉、班荆道舊、遂能以敗爲成、因喪立功。佗人尚爾、況共父之人哉。

穎川韓元長、漢末名士、身處卿佐、八十而終、兄弟同居、至於沒齒。濟北汎幼春、晉時操行人也。七世同財、家人無怨色。

詩云、高山景行。汝其慎哉。

子に書を與へて、以て其の志を言ひ、并せて訓戒を爲して曰く、

\* 「與子書」は、『宋書』本傳、「本集」に収めるものに比べ、て省略部分が多い。書き下し文は省略。

又爲「命子詩」以貽之。

元嘉四年、將復徵命、會卒。世號靖節先生。其妻翟氏、志趣亦同、能安苦節。夫耕於前、妻鋤於後云。

又た「命子詩」を爲りて以て之に貽る。

元嘉四年、將に復た徵命あらんとするに、會ま卒す。世に靖節先生と號す。其の妻翟氏、志趣亦た同じくして、能く苦節に安んず。夫前に耕し、妻後に鋤くと云ふ。

〔陶淵明傳〕蕭統（昭明太子）

(一)

陶淵明、字元亮。或云、潛、字淵明。潯陽柴桑人也。

曾祖侃、晉大司馬。淵明少有高趣、博學善屬文、穎脫不羣、任真自得。

嘗著「五柳先生傳」以自況曰、

先生不知何許人、不詳姓字、宅邊有五柳樹、因以爲號焉。閑靜少言、不慕榮利。好讀書、不求甚解、每有會意、欣然忘食。性嗜酒、而家貧不能恒得。親舊知其如

此、或置酒招之、造飲輒盡、期在必醉、既醉而退、曾不吝情去留。環堵蕭然、不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也。嘗著文章自娛、頗示己志、忘懷得失、以此自終。

「短褐穿結」「短」字、『宋書』は「短」に作る。時人謂之實錄。

陶淵明、字は元亮。或いは云ふ、潛、字は淵明と。潛陽は柴桑の人なり。曾祖は侃、晉の大司馬。淵明わか少くして高趣有り、博學にして善く文を屬つづり、穎脫えいだつ不羣、任真にして自得す。嘗て「五柳先生傳」を著し、以て自ら況へて曰く、

（「五柳先生傳」書き下し文は省略）  
時人之を實錄と謂ふ。

（二）

親老家貧、起爲州祭酒、不堪吏職、少日自解歸。州召主簿不就、躬耕自資、遂抱羸疾。

江州刺史檀道濟往候之、偃臥瘠餒、有日矣。道濟謂曰「賢者處世、天下無道則隱、有道則至。今子生文明之世、奈何自苦如此。」對曰「潛也、何敢望賢、志不及也。」道濟饋以梁肉、麾而去之。

復爲鎮軍、建威參軍、謂親朋曰「聊欲絃歌、以爲三徑之資、可乎。」執事者聞之、以爲彭澤令。

不以家累自隨、送一力給其子、書曰「汝旦夕之費自給爲難。今遣此力助汝薪水之勞。此亦人子也。可善遇

之。」

公田悉令吏種秫、曰「吾常得醉於酒、足矣。」妻子固請種粳、乃使二頃五十畝種秫、五十畝種粳。

親老い家貧しく、起ちて州の祭酒と爲るも、吏職に堪へず、少日にして自ら解きて歸る。州は主簿に召すも就かず、躬ら耕して自ら資し、遂に羸疾を抱く。

江州刺史檀道濟は往きて之を候つも、偃臥せて瘠せ餒え、日有り矣。道濟謂ひて曰く「賢者の世に處するや、天下に道無ければ則ち隱れ、道有れば則ち至る。今子は文明の世に生れ、奈何ぞ自ら苦しむること此の如き」と。對へて曰く「潛や、何ぞ敢へて賢を望まん。志及ばざるなり」と。道濟は饋るに梁肉を以てするも、麾して之を去らしむ。

復た鎮軍、建威參軍と爲る。親朋に謂ひて曰く、「聊か絃歌せんと欲す。以て三徑の資と爲さん、可なる乎」と。執事者之を聞き、以て彭澤の令と爲す。

家累を以て自ら隨へず、一力を送りて其の子に給し、書して曰く「汝旦夕の費、自ら給すること難しと爲す。今此の力を遣りて汝が薪水の勞を助けしむ。此も亦た人の子なり。善く之を遇す可し」と。公田には、悉く吏をして秫を種えしめて、曰く、「吾は常に酒に酔ふを得れば、足れり」と。妻子は固く粳を種えんことを請へば、乃ち二頃五十畝に秫を種え、五十畝に粳を種えしむ。

（三）

歳終、會郡遣督郵至縣。吏請曰「應束帶見之。」淵明歎曰「我豈能爲五斗米折腰向鄉里小兒。」即日、解綬去職、賦「歸去來。」徵著作郎、不就。

淵明故人通之、賣酒具於半道栗里之間邀之。淵明有脚疾、使一門生二兒舉籃輿。既至、欣然便共飲酌。俄頃弘至、亦無注也。

先是顏延之爲劉柳後軍功曹、在潯陽、與淵明情款。後爲始安郡、經過潯陽、日造淵明飲焉。每往必酣飲致醉。弘欲邀延之坐、彌日不得。延之臨去、留二萬錢與淵明。淵明悉遣送酒家、稍就取酒。

嘗九月九日、出宅邊菊叢中坐、久之、滿手把菊、忽值弘送酒至、即便就酌、醉而歸。

淵明不解音律、而蓄無絃琴一張、每酒適輒撫弄以寄其意。

貴賤造之者、有酒輒設。淵明若先醉、便語客、「我醉欲眠、卿可去。」其眞率如此。

郡將常候之、值其釀熟、取頭上葛巾漉酒。漉畢、還復著之。

歳の終り、たまた會ま郡督郵を遣して縣に至らしむ。吏は請ひて曰く「應に束帶して之に見ゆべし」と。淵明歎じて曰く「我豈に能く五斗米の爲に腰を折りて郷里の小兒に向かはんや」と。即日、綬を解きて職を去り、「歸去來」を賦す。著作郎に徵さるるも、就かず。

淵明の故人なる通之、酒を賣して半道栗里の間に具

へて之を邀ふ。淵明に脚疾有り、一門生二兒をして籃輿を擧げしむ。既に至るや、欣然として便ち共に飲酌す。俄頃にして弘至るも、亦た注ふ無きなり。

是より先、顏延之は劉柳の後軍功曹と爲りて、潯陽に在り、淵明と情款あり。後に始安郡と爲りて、潯陽を経過すれば、日に淵明に造りて焉に飲む。往く毎に必ず酣飲して醉を致す。弘は延之の坐に邀へんと欲するも、日に彌りて得ず。延之去るに臨みて、二萬錢を留めて淵明に與ふ。淵明は悉く酒家に送らしめ、稍に就きて酒を取る。

嘗て九月九日、宅邊の菊叢中に出でて坐す。之を久しく、手に満たして菊を把る。忽ち弘の酒を送りて至るに値ひ、即便ち就きて酌み、酔ひて歸る。

淵明は音律を解せず、而も無絃琴一張を蓄ふ。酒の適する毎に輒ち撫弄して以て其の意を寄す。

貴賤之に造る者、酒有れば輒ち設く。淵明若し先に酔はば、便ち客に語る、「我酔へば眠らんと欲す、卿去る可し」と。其の眞率なること此の如し。

郡將常に之に候す。其の釀熟するに値へば、頭上の葛巾を取りて酒を漉す。漉し畢れば還つて復た之を著く。

(四)

時周統之入廬山事釋惠遠。彭城劉遺民亦遁迹匡山、淵明又不應徵命、謂之「潯陽三隱」。後刺史檀韶苦請統之出州、與學士祖企、謝景夷三人、共在城北講「禮」、加以讎校。所住公廩、近於馬隊。是故淵明示其詩云、

周生述孔業、祖謝響然臻。

馬隊非講肆、校書亦已勤。

其妻翟氏、亦能安勤務苦、與其同志。

自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代。自宋高祖王業漸隆、不復肯仕。

元嘉四年、將復徵命、會卒。時年六十三。世號靖節先生。

時に周統之は廬山に入りて釋志遠に事ふ。彭城の劉遺民も亦た迹を匡山に遁れ、淵明 又た徵命に應ぜざれば、之を潯陽の三隱と謂ふ。後に刺史檀韶は苦ろに統之の州に出でんことを請へば、學士祖企、謝景夷の三人と、共に城北に在りて「禮」を講じ、加ふるに讎校を以てす。住まる所の公廨は、馬隊に近し。是の故に淵明は其の詩を示して云ふ、

周生 孔業を述べ、祖謝 響然として臻る。

馬隊は講肆に非ざるに、校書 亦た已に勤む。

其の妻翟氏も、亦た能く勤苦に安んじ、其と志を同じくす。

自ら以へらく曾祖は晉の世の宰輔なれば、復た身を後代に屈するを恥づと。宋の高祖の王業 漸く隆くなりて自り、復た仕ふるを肯んぜず。

元嘉四年、將に復た徵命あらんとするに、會ま卒す。時に年は六十三。世に靖節先生と號す。

注

\* 『宋書』『晉書』『南史』梁、蕭統「陶淵明傳」の著述された順序は、『宋書』、蕭統「陶淵明傳」、『晉書』、『南史』の順とな

る。

\* 『宋書』陶淵明傳と『晉書』陶淵明傳

沈約『宋書』陶淵明傳は前後二部に分かれており、前半部は『晉書』とほぼ同じであるが、後半部は沈約の加えたものである。前半部すなわち「五柳先生傳」と「婦去來辭」を引用する『晉書』の傳を踏まえた部分からは、俗世間を厭い、自然の「道」のままに悠然と暮らす隱士淵明の姿が浮かんでくるが、後半部が加わると郷里への隱棲の背後に、「少而無適俗之韻」以外の事情があることがわかつてくる。すなわち個人的には堯・舜の世から綿々と続く家柄のことであり、政治の面では晉から宋への政權の交代であった。沈約は、前半部は『晉書』の傳をほぼそのまま踏まえたうえで、必要な資料を加え、或いは繁多な箇所を簡単にし、それに後半部を加えることによって自分の考えている淵明像を記そうとしている。沈約の『宋書』陶淵明傳撰述についての意図と方法については、「沈約『宋書』陶淵明傳について」として次の機会に述べることにする。

\* 正史『晉書』について

晉宋間には『晉書』が二十種以上も編纂されていたようであり、唐初に編まれた正史『晉書』もそれらに依拠していたようだ。中華書局本『晉書』の出版説明によれば、正史『晉書』の修撰は貞觀二〇年（六四六）から二二年（六四八）まで二年餘の短期間であり、編纂者は只だ臧榮緒『晉書』を藍本としていたようだという。

沈約は陶淵明傳を編むときに、当時存在していたであろう『晉

書』に主に拠ったのであろう。依拠した『晉書』は誰の編纂したものであったか未詳であるが、おそらくそれは正史『晉書』と大差の無いものであったのではなからうか。『宋書』淵明傳の前半は、正史『晉書』とほぼ同じであるので、沈約が拠ったのは或いは臧榮緒の『晉書』であったかもしれない。

\*蕭統「陶淵明傳」

傳に使用されている史料のうち、『宋書』に無いものは①②④

で、③⑤は『宋書』にもある。

① 江州刺史檀道濟 \*

② 不以家累自隨、送一力給其子。 \*

③ 先是顏延之爲劉柳後軍功曹、在潯陽。

④ 時周統之入廬山事釋惠遠。彭城劉遺民亦遁迹匡山、淵明又

不應徵命、謂之「潯陽三隱」。 \*

⑤ 自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代。自宋高祖王業漸隆、不復肯仕。

〔『宋書』の「與子書」「命子詩」を含む後半部は、蕭統「陶淵明傳」には無い。

\*『南史』淵明傳

『南史』淵明傳は、『晉書』『宋書』と蕭統「陶淵明傳」に用いている史料の、殆ど全てを混ぜ合わせて構成されている。

\*稀代麻也子『宋書のなかの沈約』（「既成の枠の踏み越え」）

陶淵明の伝について）には次のようにある。

「陶淵明の本質を、前朝の遺臣として歸隱の道を選んだ行動ではなく、歸隱後も静かに語り続けようとしたことの方に認めたからこそ、沈約は陶淵明を晉ではなく宋に歸せしめた

のではないか。自分の生活を自分の言葉で正確に伝えようとし続けた人物としての淵明を描きたいという沈約の思い入れが、様々な存在する枠を踏み越えさせた結果、偶像化された隠士ではなく、人間としての深みを増してゆく表現者陶淵明が生まれたのである。」